

造形遊びの17類型をもとに 鑑賞教育を構想する試み

岡田 匡史

Art Appreciation Based on 17 Categories of Zōkeiasobi(Formative Play)

Masashi OKADA

(Received November 30, 1992)

キーワード: 表現-鑑賞1セット、高学年での鑑賞の独立的扱い、鑑賞学習の計画化・系統的組織化、造形表現の体系的整理、表現と鑑賞の連繫・相互発展、造形遊びの17類型、17類型に基づく鑑賞教育、作家活動の参照

I 序——学習指導要領改訂後の鑑賞指導

新『小学校学習指導要領』では、高学年の鑑賞指導の在り方について重要な注目すべき改訂事項が示されている。それは、鑑賞を表現活動と相互補完的關係をもつように位置づけるといふ、従来の表現-鑑賞1セットの考え方を改めて、高学年では鑑賞を表現と分離させ独立して扱ってよいとするものである。

この考え方の背後には、鑑賞教育がこれまで表現に従属した性格をもち、学習内容が計画性・系統的組織性に欠けがちであったという反省がある。また、美術評論の立場からこのことに関連して明確な趣旨の発言があった。東野芳明氏は、日本の美術教育が表現偏重であり、美術を鑑賞・批評する肝腎な眼を養い育てることが欠けていると手厳しく批判した⁽¹⁾。こうした見解に対しては、子どもの心身および造形表現の自然な発達という観点から、美術の鑑賞的理解ということよりも、材料体験や造形的発想、問題解決上の試行錯誤をたっぷり含んだ表現活動に重点を置くべきであるという根強い反発がある。

しかし、要は重点領域は表現か鑑賞かという序列の問題ではなく、表現と鑑賞がしっかりと統合された、充実したトータルな美術体験をどのように構築していくかということが課題として認識されるべきである。その認識に立って、鑑賞の学習内容の適切な計画化・系統的組織化と鑑賞指導の充実を考えるべきである。

II 鑑賞教育のしかるべき在り方と目標

それでは、表現への従属を離れ、独立した鑑賞の学習指導とはどのようなものであろうか。鑑賞の学習指導の在り方としては、美術の本質的原理の解明を試みる美学の学習、古

今東西の美術史の学習、作家論の学習、また、現在進行形的美術動向を読み解くための美術評論に関する学習等を中味とする、いくつかの形態が列挙できると思われる。しかし、それらの学習が表現活動を通じて形成される造形体験の基盤と全く切り離されて行われたならば、子どもにはかなり抽象的で高度な理論学習と映るであろう。そうなれば、一方では表現、他方では難解な鑑賞と、2種類の美術の学習が連繋性がほとんどないまま子どもに押しつけられるという悪しき結果を招くことになる。

筆者としてはやはり鑑賞の基盤には表現があるべきだと考えている。表現と鑑賞の連繋の度合いが強ければ強いほどよいと思われる。ただし、鑑賞の内実が問われぬまま、両者がただ機械的に組み合わせられていけばいいとは思わない。それでは従来の表現－鑑賞1セットと基本的には同じである。

鑑賞の学習は、作品鑑賞の域に留まるもの、つまり、ある作品を観てその造形的特徴を評価し、また、付随的にその作品を製作した作者の造形的コンセプトや時代背景等について理解するといったものでは十分ではないと思われる。鑑賞教育の主たる目的の1つとして、作品の鑑賞・理解の他に、子ども自身の行ってきた多様な造形表現をいくつかの基本的観点より系統的に整理して理解させ、そうして養われた柔軟かつ筋道立った造形思考のもとに、子どもの造形活動がさらに応用的・発展的に行われるようになるということがあると思われる。こうした鑑賞と表現の一体的展開は、作家の造形活動の成長過程とある程度類似する側面をもっている。そして、そのような造形表現の各種特質を理解する鑑賞学習の計画的配列のなかに、それらと関連する作家による多様な造形表現を適宜配置すれば、鑑賞的理解が一層促進し厚みを増すことになると思われる。

このように組織された鑑賞の学習内容は、理解が容易であり、また、子ども自身の造形体験を基盤に自ずと深く浸透して、表現活動に効果的に連動するものと思われる。ここで得られる結論は、鑑賞教育においては以下の4点が重要だということである。

- ①子ども自身の造形体験を基盤にしての造形表現の体系的整理と深い理解
- ②整理された観点と筋道をもつての多様な作品・造形活動の計画的な鑑賞
- ③造形表現に対する興味を増大
- ④鑑賞の学習成果の表現活動への効果的なフィードバック

なお、個別的に設定された美術史の学習は、表現活動の質的な発展に直接連関することは少ないかと思われる。小学校または中学校段階での鑑賞教育においては、上記4点を基本的な目標事項に据えたうえで、美術史の学習も含む多様な学習活動の展開を考えることが適切ではないかと思われる。

III 造形遊びの17類型と鑑賞教育

こうした観点からどのような鑑賞教育の形態を構想することができるのであろうか。このことについて今度は考えてみたい。

話が横道に逸れるが、新『小学校学習指導要領』では、造形遊びは実施対象学年が従来の低学年から中学年にまで拡張され発展的に位置づけられた。この趣旨は評価すべきであるが、筆者には造形遊びの活動内容がこれまでも余りに多様で混乱気味であると思われていたため、今回の改訂を機に基本的な分類項目を設けて活動内容を整理しようと試みた。

その作業過程で、目下取り組んでいる試みが実は造形表現全般の基本類型を整理する試みであることに次第に気づきはじめていたのである。結果的にはこの作業を通じて造形遊びの17種類の活動類型が得られた。それらは以下の通りである。

1. インスタレーション的活動
2. 建築的活動
3. 構成的活動（接合彫刻へと発展）
4. 工作的活動
5. 切り貼りの活動
6. コラージュ、アサンブラージュ的活動
7. リサイクル的活動
8. 装飾的活動
9. 描画材（クレヨン、絵具等）による色遊び的活動
10. 造形行為の過程および結果を楽しむ活動
11. 落書き的活動
12. アースワークスの活動
13. エコロジカル・アートの活動
14. 見立てに基づく活動
15. 材料・造形物で遊ぶ活動
16. パフォーマンス的活動
17. マルチメディア的活動

この類型化の作業で対象となる造形表現とは、造形遊びの基本性質を反映して、いわゆる絵画・彫刻に代表されるような、作品という価値の創造を最終目標とする製作活動に限定されないものである。要するに子どもが材料を用いて行うかなり広範囲な造形活動が考察・検討の対象になる。すると、これまで造形表現としては取り上げにくかったものまでが包摂できるようになり、この作業は結果的に人間による基本的であり始源的とも言える多様な造形表現を類型化するような性格のものになっていったのである。そうした幅広い造形表現を使用材料、活動場所、活動形態の各特徴、および、造形表現の目的・主題や、造形表現を根底において始動させる基本原理等の諸視点により分析・類別することによって、上記17種類の活動類型が得られたのである。

そこで、筆者はこの造形遊びの17類型を高学年の鑑賞教育に応用できないかと考えた。つまり17類型に基づき、子どもが取り組んできた活動も含めて造形表現の多様な事例を整理し、それらを子どもに系統的に鑑賞・理解させたらどうかということである。17類型は前述のように造形遊びの特質を反映して、造形活動の過程や活動自体の特徴を中心にまとめられている。従来の鑑賞は、主に絵画・彫刻のような造形活動の最終結果としてパーマネントに残り存続する作品を対象としていたが、17類型に基づく鑑賞は、作品の外観的な性質を観る前に、まず創造の根源に降りて、そうした作品を生む活動自体について考えることに注意を促し、最終的に人間による造形表現全般への興味と理解を増させるものであると考えられる。もちろん学習の充実のために各類型と対応した参照に値する作家の仕事も多数取り上げて適切に説明すべきである。

この17類型に基づく鑑賞に関しては、鑑賞と表現との密接な**連繫**という点も強調したい。高学年では造形遊びや他の表現活動を通じて豊富な先行学習が蓄積されてきているた

め、授業を適切に計画すれば、その蓄積を基盤に鑑賞の学習が効果的に進展し、子どもの造形表現に対する興味は一段と拡がることになろう。その学習成果は表現活動にいろいろと影響を及ぼすはずである。鑑賞学習を通じてこれまでに経験した自己の表現活動をふりかえって整理し、新たな観点を心得て造形表現のさらなる発展を意欲的に図ることが期待できると思われる。

なお、造形遊びの17類型の詳細については、個々の活動内容のポイントを解説し、併せて各類型と関連する造形遊びの指導実践例や作家の活動を記した2本の拙論、「造形遊びの類型化の試みⅠ⁽²⁾」と「造形遊びの類型化の試みⅡ⁽³⁾」を参照願いたい。本論では以下に17類型の各特徴について簡潔に解説し、参考作家を記すに留める。

1. インスタレーション的活動: 材料の設置を基本とし、置く、並べる、積む、組み合わせる等の、造形表現の最も基本的な単位と考えられるような活動。

参考作家: ドナルド・ジャッド、カール・アンドレ、ダン・フレヴィン、李禹煥、リチャード・ロング、ウォルター・デ・マリア、國安孝昌、遠藤利克、デイヴィッド・マック、サンディ・スコグランド、アラン・マッカラム等。

2. 建築的活動: 比較的大きい材料を使って、建築的構想を発展させながら、迷路、隠れ家等の遊びの空間を製作するような活動。

参考作家: クルト・シュヴィッターズ、マリオ・メルツ、ジュディ・パフ、高木修、川俣正等。

3. 構成的活動 (接合彫刻へと発展): インスタレーションの基本技法に、道具類を使っての裁断・加工や、釘、接着剤、ガムテープ、ヒモ等の補助材を使っての接着・接合が加わって展開される、構成的志向の強い活動。作品として完成した場合には接合彫刻となる。

参考作家: パブロ・ピカソ、ジュリオ・ゴンサレス、ウラジーミル・タトリン、デイヴィッド・スミス、アンソニー・カロ、フランク・ステラ、ナンシー・グレイヴス、岡崎乾二郎等。

4. 工作的活動: 特徴ある多様な材料を利用し、種々な造形技法を駆使して身近なものを製作する、クラフト的要素が強い活動。

参考作家: アレクサンダー・カルダー、クレス・オルデンバーグ、ニキ・ド・サンファール、ロドニー・リップス、イタロ・スキヤガ、日比野克彦等。

5. 切り貼りの活動: 色紙、布類をハサミで好きな形に切ってノリで貼り、絵柄や装飾模様や色・形の配置構成を楽しむ活動。

参考作家: アンリ・マチス、トム・ホランド、ロバート・クシュナー、前記岡崎等。

6. コラージュ、アサンブラージュの活動: 集めた種々雑多な材料を台紙に接着して画面構成したり、接合して寄せ集め風の立体物を製作したりする活動。

参考作家: 前記ピカソ、ジョルジュ・ブラック、前記シュヴィッターズ、マックス・エルンスト、ジョセフ・コーネル、ルイズ・ニーヴェルス、ロバート・ラウシェンバーグ、アルマン・フェルナンデス、ジュリアン・シュナーベル、デレク・ジャーマン、大竹伸朗等。

7. リサイクル的活動: ゴミ問題・資源問題の見地からゴミ、廃材に着目し、それらの造形的価値を積極的に見出だして、創造的なりサイクルを展開することを目標に置く活動。活動が文明批評的な側面をもつ場合が多い。

参考作家: 前記ピカソ、リチャード・スタンキヴィッチ、ジャン・ティンゲリー、ジョン・チェンバレン、セザール、トニー・クラッグ、篠原有司男、三宅康郎、殿敷侃、前記大竹等。

8. 装飾的活動: 装飾的な描画・彩色、巧緻な細部表現、造形的パターンの反復的な配置構成や空間の充填等による装飾の活動。

参考作家: グスタフ・クリムト、前記マチス、前記ステラ、前記リップス、ロバート・S. ザカニッチ、前記クシュナー、フィリップ・メイベリー、ケニー・シャーフ、北山善夫、前本彰子等。

9. 描画材（クレヨン、絵具等）による色遊び的活動: クレヨン、絵具等の描画・着色材を扱うことによって、色の発見・体験学習を進める活動。

参考作家: ヴィレム・デ・クーニング、マーク・ロスコ、バーネット・ニューマン、クリフォード・ステイル、ヘレン・フランケンサーラー、モーリス・ルイス、ケネス・ノーランド、サム・フランシス、前記ステラ、井川惺亮、根岸芳郎、中村一美等。

10. 造形行為の過程および結果を楽しむ活動: 活動自体とその結果の双方の面白さから自発的に展開し、とくに活動過程（時間性）や行為（身体性）を重要視する点に特徴がある活動。

参考作家: パウル・クレイ、前記エルンスト、イヴ・クライン、ジャクソン・ポロック、フランツ・クライン、前記ステラ、アグネス・マーティン、前記ロング、クリスト、前記李、菅木志雄、関根伸夫、前記川俣、前記國安、前記遠藤、戸谷成雄等。

11. 落書き的活動: 絵画作品を基本的に志向しない、描く活動の最も本源的な形態。幼児期のスクリブルが発達的には最初のものである。

参考作家: サイ・トゥオンブリー、ソル・ルウィット、前記ロング、キース・ヘリング、リチャード・ハンブルトン、フューチュラ2000、ジョナサン・ポロフスキー等。

12. アースワークスの活動: 地面、砂漠、海岸、雪原等に巨大な造形的痕跡や構築物を残す、アースワークスの系譜に属する活動で、砂場遊びや地面絵遊び、また、最近話題のミステリー・サークルのようなもの。

参考作家: ロバート・スミッソン、マイケル・ハイザー、前記ロング、デニス・オッペンハイム、アンディ・ゴールズワージー等。

13. エコロジカル・アートの活動: 自然愛護・環境保全というエコロジカルな意識をもって、自然物が備える見事な造形的特質や風景美を発見・鑑賞し、それらをモチーフに表現を展開したり、また、自然体験を基軸に野外でそこにある自然材を使って遊びや造形表現を試みたりする活動。環境問題に直接アプローチする活動も含まれる。

参考作家: 前記ロング、ヨゼフ・ボイス、ニュートン&ヘレン・M.ハリスン、アグネス・デネス、アラン・ソンフィスト、前記ゴールズワージー、エイプリル・ゴニック、バスター・シンプソン等。

14. 見立てに基づく活動: あるものを形状が類似する別のものとして見たり、別の意味・機能をもつものとして扱ったりするような、見立ての働きを基盤に行われる活動。

参考作家（事例を含む）: アルタミラ洞窟壁画、ジュゼッペ・アルチンボルド、前記ピカソ、前記ゴンサレス、前記クレイ、前記エルンスト、サルバドール・ダリ、前記カルダー、前記クラッグ、デボラ・バターフィールド、命名期から知的写実性期にかけての子どもの描画表現、ままごと遊び等。

15. 材料・造形物で遊ぶ活動: 紙、木、空きカン、ヒモ等の身近な材料や、紙飛行機、凧、コマ、パチンコ、弓矢、フリスビー等のようにそれらで製作したもので遊ぶ活動。

参考作家: 前記ピカソ、前記カルダー、前記菅、鈴木昭男、吉村弘、ローリー・アンダーソン等。

16. パフォーマンス的活動: 従来の美術表現の受容に関する「作品—鑑賞者」という図式を脱し、「作家自身による表現行為—観衆」という新しい枠組で、自らの身体を用い、観る側との直接的コミュニケーションに重きを置く、パフォーマンスの系譜に属する活動で、変身・仮装ごっこが代表的なもの。作家の活動に関しては、行為・身体表現がシンプルに強調されるもの、歌、楽器演奏、朗読、ダンス等を中心に展開するもの、仮装表現、コスチュームや舞台美術に凝り演劇的規模を有するもの等、さまざまな表現が模索されている。

参考作家: 前記ピカソ、オスカー・シュレンマー、マルセル・デュシャン、ジョン・ケージ、マース・カニングム、アラン・カプロー、フルクサス、前記ボイス、ナム・ジュン・パイク、小杉武久、一柳慧、前記鈴木、前記イヴ・クライン、ギルバート&ジョージ、前記オープンハイム、パット・オレスコ、田中泯、前記アンダーソン、立花ハジメ、原田大三郎、ロバート・ウィルソン、ピナ・バウシュ、シンディ・シャーマン、森村泰昌、ステイヴン・キャンベル等。

17. マルチメディア的活動: 光、映像、音、各種動力源、多様な材料を用い、領域を越えて各種の表現が組み合わせられた、総合的・相互横断的な表現を試みる活動。

参考作家: ①光の系譜: ルーチョ・フォンターナ、前記フレヴィン、ブルース・ノーマン、ジョン・ケスラー等、②映像の系譜: 前記パイク、久保田成子、山口勝弘、ビル・ヴィオラ、三田村峻右、宮島達男等、③動きの系譜: ナウム・ガボ、前記デュシャン、前記カルダー、前記ティンゲリー、前記オープンハイム、アリス・エイコック、伊藤隆道、新宮晋等、④音の系譜: ルイージ・ルッソロ、ブライアン・イーノ、前記鈴木、増田感、松村要二、ロルフ・ユリウス等、⑤総合表現の系譜: 前記アンダーソン、前記ウィルソン、前記バウシュ、ヤン・ファープル、前記ボロフスキー、ジェニファ・バートレット、ロバート・ロンゴ、前記大竹、吉原悠博等。

IV 結論

本論で提起した鑑賞教育は無論試案の域を出るものではない。しかし、17類型の基本的柱の導入により、これまで弱かった計画性・系統的組織性を鑑賞教育に与えることができるのではないか。高学年での鑑賞教育を念頭に置いたが、鑑賞の充実は中学校でも重要な課題であり、その中学校でも展開可能な内容だと思われる。従来の作品鑑賞や美術史的理解を求める学習、また、現在展開中の美術動向の理解・評価に重きを置くような、美術評論的な観点からの学習とは一味違って、この鑑賞教育は、整理された観点と筋道をもって、子どもが自分も授業で行ってきている造形表現の活動をどう捉え考えるか、そして、そこで得たものを今後の表現活動にどう結びつけ発展させていくかという点に最大の重きを置くものである。

この鑑賞の学習が子ども自身の表現活動を基盤に置いて組織されるがゆえに、鑑賞と表

現とが有機的に繋がり、鑑賞が表現活動を刺激し活性化させるような状況が生まれるものと思われる。さらに教師が計画的に配置し解説する作家の活動を、子どもが自分の活動と比較し、その活動の特質を理解しながら、結果的に美学・美術史・美術理論等にまたがるトータルな学習活動の展開を期待することもできる。鑑賞的理解が子どものなかにしっかりと根つき構築されていけば、表現と鑑賞が相互発展的に時に意外な形でフィードバックするような展開が可能になる。そのような生き生きとした授業構造がこの鑑賞教育によってある程度実現できるのではないかと思われるのである。

註

- (1)東野氏は「第23回教育美術賞・選評」で次のように述べている。「美術教育は、なにもつくり手の芸術家の養成だけが主眼ではあるまい。何もつくらなくても、人類がさまざまに世界を見、感じとってきた結果としての作品をふんだんに見て、美術的記憶を日にためこむことのほうも大切だろう。」東野芳明「選評」（『教育美術 [特集] 第23回教育美術賞』1988年8月号[vol.49 no.8] 所収、財団法人教育美術振興会)p.11.
- (2)岡田匡史「造形遊びの類型化の試みⅠ」（『美術教育学—美術科教育学会誌 第13号』所収、美術科教育学会、1991年12月)pp.127-138.
- (3)岡田匡史「造形遊びの類型化の試みⅡ」（『教育実践研究指導センター研究紀要 第3号』所収、山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター、1992年3月)pp.61-71.